退官

国立大学は独法化に向けて新たな展開を迎えようとしています。一致団結してことに当り、しこりを残さず前進してください。

退官に当たって

人文学部　教授
苅部　恒徳

新潟大学に勤務して35年になります。定年まで無事来れたのも学生教職員の皆様のお蔭です。この場を借りて心から御礼申し上げます。本人にとってはあっという間の35年間でした。しかし母校でもある新潟大学にどれほどの貢献ができたか振り返って見ますと、内心忸怩たるものがあります。この間２度大きな変革を経験しました。一つは大学紛争であり、もう一つは教養部改組です。昭和42年に本学教養部に赴任して程なく、すでに全国のいくつかの大学で始まっていた学園紛争の嵐が本学ではまず教養部に吹いてきました。新潟大学では五十嵐への統合移転反対を叫ぶ学生たちによる運動がエスカレートしました。担任した農学部１年生のクラスが移転反対の意志表示として一昼夜ハンガーストライキを組みました。非暴力的な仕方で抵抗を示した学生たちは偉いと思いました。紛争は収束し、今改装中の教養校舎への移転も実現しましたが、学生教員共に虚脱感に襲われました。次に吹いたのは教養部改組の嵐です。特に私たちのような語学担当教員はいくつかの学部への分属が決まり、お互いつらい思いをしました。でも結果的には教養教育は全学でこれにあたることが確認され、徐々に実行されてきていることは明るい展望です。国立大学は独法化に向けて新たな展開を迎えようとしています。一致団結してことに当り、しこりを残さず前進してください。

新潟大学の教育と研究が、地域に根づきながら良い形で展開していくように遠くから見ていたい。

５年間の勤務を終えて

人文学部　教授
藤本　強

２度目の退官、しかも５年間という短い間の勤務であったので、さしたる感懐もないままに去ることになる。着任した当座は戸惑うことが多かった。それまで新潟市にはほとんど来たことがなく、また、新潟大学にも一度非常勤講師として来たことがあるだけで、およそ馴染みのない大学と土地に来たので、「新潟大学では」、「新潟では」の言葉に当惑することが多かった。

５年間居た今でも、正直いうと大学にも土地にも十分に馴染んだとはいえない状況のまま去ることになる。５年間何をしていたのかを考えると、それらしいことは何もしていなかったのではないかという思いに駆られながらいるのが現在の心境である。

５年という歳月は長いようで短い。まとまった仕事ができるとは思っていなかったが、あっという間に過ぎていったというのが実感である。５人ほどの学生を卒業させ、５人ほどの修士を誕生させたのは、形の上では教育上の成果であろうが、それらの学生に何が残せているのかは自信がない。

国立大学をはじめとして大学というものがさまざまな面で大きく変わ

ろうとしている時に去ることになるのは幸運だといってくれる人もあるが、これもよくはわからない。新潟大学の教育と研究が、地域に根づきながら良い形で展開していくように遠くから見ていたい。

退官の記

教育人間科学部　教授
佐竹　昭臣

「東京生まれ、東京育ちのお前が、どうして新潟くんだりまで行かなければならないのかい」と母は嘆く。この母の嘆きを振り切って、私は家内と４歳になる長男とを引き連れ、上野駅から高田（現上越市）に向かって列車に乗った。長野駅を過ぎると列車は、深く霧の立ち込める山の谷底へと飲み込まれるが如く、滑り降りて行った。はたして自分の決断は正しかったのか、身の凍える思いであった。

あれから34年。長男も新潟大学がご縁で、気立ての良い嫁を娶り、二人の孫をもうけて仙台にいる。新潟行きを嘆いた母も、今では父と伴に内野中権寺の霊園に眠っている。このたび東京方面に職を得て、川越に移り住むことになった私ども夫婦も、いずれは父母の傍らに安らうことになるであろう。まさに新潟は、新潟大学は、我が人生の全てである。

学部長として立ち会った教育人間科学部の新設は、文字どおり、私の命をかけての出来事であった。それは単に外圧に屈してのものではなく、私の長年の持論と夢とを実現するものでもあった。しかしその新学部の理念も広く理解されることもなく、今や時代の波にさらわれ、消え去ろうとしている。大学も、優れた「研究者」を擁してはいても、今や「大学人」という言葉は死語になりかけている。この大学の現状を憂いつつも、今はただ、ここまで私を支えて来てくださった多くの方々に、深甚なる謝意を表し、立ち去る次第である。誠に、長い間、ありがとうございました。

まさに新潟は、新潟大学は、我が人生の全てである。学部長として立ち会った教育人間科学部の新設は、文字どおり、私の命をかけての出来事であった。

生気ある創造性の復活を願う

教育人間科学部　教授
小磯　稔

私は大学卒業後、企業やフリーデザイナーといった職業を通していろいろな体験をしてきた。音響製品や家庭用機器のデザインを始め、専門の漆芸、紅型染めや友禅染めの制作など数えたらきりがない。その後、母校で色彩研究を重ね、当学部へ赴任したのが昭和52年である。

教員養成学部だからこそ、いままでの造形体験を幅広く学生に伝えようと意気込んで出勤したものの、私が担当する工芸やデザインの実習室や設備は何もなかった。それでも、当時の学生たちはハングリーな環境下で用具を工夫しながら造形を楽しみ、創造性を養ってきた。少しでも環境を整えようと、この24年間少ない研究費のほとんどを設備に費やしてきた。しかし、それもつかの間、美術科もいつの間にか映像やコンピューター主体の環境に変わってしまった。学生は手っ取り早いＣＧや奇抜な表現などに興味を注ぎ、デッサンや表現技法等の基礎の習得には興味を示さなくなってしまった。

赴任当時の学生たちは互いにモデルをしながら彫刻や絵画を描き、汗にまみれて彫金や木彫を行い、夜には酒を酌み交わしながら時間がたつのも忘れて葛藤をくり返していた。

何の苦労もしないで情報が入手でき、無機質ながら一応の形は表現できる機器の発達により、そんなエネルギーまで奪い取られてしまったようである。

退官にあたり、生気に満ちた創造力の復活を願ってやまない。

退官にあたり、生気に満ちた創造力の復活を願ってやまない。